薬学領域の日本語―中国語対比表

薬学雑誌　1905年(明治38年)225頁，1056頁

日本薬学会はアジアでいち早い近代化を遂げ，西欧化に向けて進むなかで化学・薬学用語の日清対語表(いわゆる日中辞典)を掲載している．日本と中国…漢字が共通ゆえに概ね同じでは？と思っていたが，なかには微妙な相違点が見受けられる．

当時，清国での元素記号は，弗(フッ素)，燐(リン)，炭(炭素)，硫(イオウ)は日本語とほぼ同じ表記で馴染みがある．しかし，輕(水素)，養(酸素)，綠(塩素)などは元素の特性そのものを表現していて興味深い．さらに，これらを漢詩のごとく使い，分子式も表現している．例えば，輕二養(H_2O)，輕綠(HCl)，輕三燐養四(H_3PO_4)，輕二硫養四(H_2SO_4：繁用のためか，さすがに“硫酸”としても良しとのこと)．なかでも比重は「水權[1)]」と表され，古代ギリシャのアルキメデスによる比重発見の「黄金の冠」のエピソードを連想させる表現となっている．改めて表意文字である漢字の奥深さを感ずる．他に汞(水銀：殺菌剤の $HgCl_2$ が昇汞と呼ばれるのは無機化学では馴染み深い)，藥臼(乳鉢)，藥杵(乳棒)，藥秤(天秤)など，なるほど！と感ずる表現が多い．

そもそも著者の一人は，従軍により中国東北部に駐留していた．その公務の間をぬってこれらの用語を収集し，会員の役に立てばと投稿している(加えて，“余白を借りて…”とはなんとも奥ゆかしい)．折りしも掲載誌発刊は日露戦争(1904～1905)直後と思われ，我々がアジアをリードしなくてはとの先達の弁が文字に残されている．

“戦勝後の日本は吾人國民の大に世界的發展をなすと共に特に清韓兩國に對しては自を先鋒者となりて誘掖するの責務あり…”

国内・アジアへの同胞意識の大きな時代であった．

小尾紀行

1)「權」は現代では「権」だが，「量る」の意味がある．